

会 議 記 録

高松市附属機関等の設置、運営に関する要綱の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会 議 名	令和6年度第1回高松市伝統的ものづくり振興審議会
開催日時	令和6年5月28日(火) 午前9時00分～午前10時40分
開催場所	四番丁スクエア 1階 第1会議室
議 題	(1) 会長・副会長の選任について (2) 伝統的ものづくり振興施策に関する取組について (3) その他について
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input type="checkbox"/> 非公開
上記理由	公開
出席委員	井藤委員、大西委員、竹内委員、中條委員、よしおか委員
傍 聴 者	0人 (定員 5人)
担当課及び 連絡先	産業振興課 創造産業係 839-2411

審議経過及び審議結果

(事務局)

高松市伝統的ものづくり振興審議会規則第3条第2項の規定により、会議成立の報告。

高松市情報公開条例第7条各号に該当しないため、公開とすることを決定。

議題(1) 会長・副会長の選任について

会長は井藤委員、副会長は大西委員に決定。

議題(2) 伝統的ものづくり振興施策に関する取組について

伝統的ものづくり振興施策に関する取組について、事務局から報告。

(委員)

オープンファクトリー事業のターゲットは、どこまで絞るのか。

(事務局)

はっきりとターゲットは絞ってはいないが、本気で伝統的工芸品に携わりたく、職にしていきたい方に参加いただきたいと考えている。

(委員)

伝統的ものづくりのカテゴリーは、香川漆器と庵治石に絞っているのか。また、庵治石は、どういった受入方法を取るのか。

(事務局)

今年度については、香川漆器と庵治石に絞りたい。事業の企画に当たり、事業者に聞き取りを行ったが、庵治石製品の製造過程は分業制になっており、既に庵治石に携わっている方が別の工程を学んでいただくことをイメージしている。

審議経過及び審議結果

(委員)

事務局の説明の整理をすると、昨年度については、「普及啓発」と「事業者に対する支援」を中心に行い、「需要の減少」と「後継者不足」が課題として表れてきたと。今年度については、「オープンファクトリー事業」、「後継者の育成」、「展示会への出展」、「産地組合への支援」を実施する。

令和7年度は、「香川漆器の新製品の開発」と「首都圏の展示会への出展」を取り組みたいとあるが、産地組合の伴走型支援を特に強化し、令和7年度につなげていきたいという認識でよろしいか。また、オープンファクトリー等の新規事業については、継続的に続けていくのか。

(事務局)

「香川漆器の新製品の開発」と「産地組合への支援」による伴走型支援は別の事業として進めていきたいと考えている。

まずは、売りに行くことを意識したい。昨年度まで展示会出展の補助制度はあったが、事業計画書のプレゼン審査があったため、ハードルが高かった。B to BやB to Cに限らず、まずは売りに行くことを意識してもらいたいと考えている。また、来年度以降の話になるが、バイヤーが集う首都圏での展示会や大阪・関西万博への参加など、本市でブースを構えて事業者に参加いただきたいと考えている。

オープンファクトリー事業は、継続したい。育成奨励金も、1年での成果は難しいと考えているため、継続的に続けていきたいと考えている。

(委員)

オープンファクトリー事業について、後継者になりたい方をターゲットにしていると話があったが、昨年度、商工会議所の工芸部会が中心となって高松工芸高校の生徒に対して、ものづくりに携わる各会社の若手社員との意見交換会を行った。企業からも学校からも好評であり、今年度も実施を予定している。座談会だけでなく、将来を考えている生徒たちに事業者の現場を見学していただくコンテンツを盛り込めたら将来につながると感じた。

(委員)

高松市の伝統的ものづくりは23品目ある中で、事業内容が香川漆器と庵治石の2つに特化しているように感じる。もちろん、実際に活動されている事業者の数は多く、産業振興という意味でも非常に大きな力があるというのは理解しているが、後継者の問題については、残りの21品目は、もっとシビアな状況であるため、伝統的ものづくりの母数が減ってしまう可能性がある。そこに関してどう考えているか。

(事務局)

御指摘のとおりである。事業については、全体として広げられるものと特化してやるものに分けて考えたい。まず、展示会出展については、伝統的ものづくり23品目を対象にしている。その他は、まずは、「香川漆器」と「庵治石」に特化し、今後、随時増やしていきたい。

(委員)

10万円の展示会補助金事業については、広く募集すると認識したが、審査方法については、先着順なのか。予算についてはどのぐらいの規模なのか。

(事務局)

展示会出展の予算については、100万円である。昨年度までは、一定

期間公募した後、内容審査を行っていたが、申請のハードルを下げたかったため、先着順とした。

(委員)

事務局の説明を聞いていて、解決しなければならない悩みがたくさんあると感じた。当方から3点提案したい。

まず、1点目は、高松市にも香川県にも大変歴史があり、多くの先人の事例があるため、その先陣の事例を知ることが重要であるということが1点目。

2点目に、「センス」が重要だと考える。多くの先人にあったものは「センス」であり、経営センス、マーケティングセンスと種類があるが、現実を見て、そこに対してどのような解決策を考えるのか、なぜそれをやらなければならないのかという「センス」が重要である。販路開拓のために首都圏への出展や、パイヤーの紹介など、どこにでもあるような施策について、全国の成功事例を過去に遡り、予算規模など同じ経緯の中で、なぜ成功したのかということ进行分析することが大切だと考える。そういったアンテナを広げることにより、どこにでもあるような施策を実施するのではなく、たとえ少ない予算であっても、成功につながっていくのではないかと考えている。

また、「センス」というのは、我々だけではなく、全員が持たなければならない。例えば、審査の際に「センス」を測れる者に審査をしていただくことも良いのではないかと提案したい。

3点目は、連携をいかにするか。各課で横断的にキーマン同士の連携を図っていただきたい。補助事業への申請は、面倒くさいからやりたくないという話をよく聞くが、10万円の補助事業について、簡略化された仕組みになったことは、非常に良いものだと感じた。商工会と商工会議所との連携も必要と考える。横串を指すようなイメージで連携していただきたい。

(委員)

施策の一つ一つに対して想っていることを伝えたいため、気軽に話し合える場が必要ではないと感じた。

大切な税金から補助事業を行っており、せっかくの補助金をいきたものにするために伴走する形で関わりたいと考えており、当たり前についている予算について、もう一度考えていただきたいと感じた。市として展示会に出展することは応援したいが、香川漆器と庵治石だけではなく、伝統的ものづくりの全てを出展し、継続することが意味のあるものではないと感じる。

振興という意味を考えると、良いものを紹介しても、それが売れるかは別問題である。振興ということは、売れるものがあり、作るものがある。それでなければ雇用できないし、将来性のない事業に自分の子どもを就職させたくないと感じるだろう。「やしまーる」では、盆栽、香川漆器、庵治石を成功事例にしたいと考えており、現在、盆栽は、持ち帰りに躊躇されるが、海外の方に非常に売れている。展示すれば良いのではなく、実際に売るところを増やすことが大切。こういった方をターゲットにするか定めてからイベントを行ったほうが良いと感じている。インフルエンサーなどの影響力のある方に紹介していただくと、一気に拡大する事例があるが、ただインフルエンサーを連れてきても意味がなく、本当に業界に通じている方が信頼ある情報を発信し、ものづくりのストーリーや歴史などを理解されている方へPRすることが大切である。需要が増えることで雇用が生まれるため、一つ一つの事業についてももう少し話し合える審議会の場がほしい。

(事務局)

当該審議会以外でも情報提供いただきたいほか、本市としても情報提供をさせていただきたいと考えている。イメージはたくさんあるが、財政的にも限りがあるため、どこから手を付けるのが効果的なのかを考えている。

(委員)

高松市が工芸のまちであるほか、漆器が有名なことを知らない人が多く、市民でも知らない人がいる中で、伝統があり、工芸が振興されてきた街、「工芸のまち高松」という大きな戦略を横断的に行っていないと意味がなく、知らない人を減らしていきたい。

(委員)

盆栽は現在ブームが来ていると感じる。庵治石とのコラボレーションも行っており、一点ものとして人気がある。個人的には別の伝統工芸士の職人同士が交流し、「やしまーる」の屋根が庵治石で作られているように、別の素材を使って、市の工芸品を全体でPRすることも可能だと考えている。

(委員)

ブランドを作るのは難しいが、育てることは可能かもしれない。子どもたちに教えているのも1つかもしれないが、言葉選びなどの「センス」を考えていただきたい。全国的には「工業高校」が多い中、香川県は、なぜ「工芸高校」があるのかという、市民や県民が当たり前を感じていることが、実は特別なことだったということでブランド化は簡単にできる。ただ、盆栽の職人が紹介するだけでは意味がない。そこにセンスワードを盛り込み、そのキーワードさえ覚えていれば、子どもたちはいつまでたっても高松出身であることを誇りに生きていける。ぜひ、職員の皆様の想いを実現できると思うのでセンスワードを入れ込んでいただきたい。

また、法の改正についての情報発信を行政からしていただきたい。輸入制限の変更があったことで、盆栽がヨーロッパで取引されているが、輸出していない盆栽農家への情報提供や、バイヤーやお客様への空港検疫の注意喚起、盆栽を売りたいときに法的な観点からアドバイスすることは、行政の立場からできるため、いかに市場の拡大までサポートできるかで、成果は変わってくると考える。そこまで手が回らないのが縮小産業の現実であるため、職員の方が次のステップへのサポートをしていただきたい。

(委員)

その時々には盆栽の問題は変化しており、そういったことが今ちょうど抜け落ちてしまっているのかもしれないと感じている。

(委員)

令和6年度の予算額についての内訳はどのようになっているか。

(事務局)

伝統的ものづくりの予算については、今年度から高松市の主要事業の1つに格上げした。全体で11,485千円。展示会補助金事業は100万円。オープンファクトリー事業については、約123万円。育成奨励金については、今年度から開始されるが半年間であるため、90万円。伴走型支援事業については、香川県と合わせて600万円。今年度から、人材育成を強化していただきたいため、半分は育成、半分は販路開拓への使用をお願いしている。

(委員)

令和7年度については、予算が増えるのか。

(事務局)

認められるか分からないが、予算は新たに獲得したいと考えている。

(委員)

令和7年の商品開発について、第1弾は香川漆器だけということか。

(事務局)

そのとおりである。予算の確保でいうと、首都圏や大阪・関西万博への展示会を狙いたい。

(委員)

そちらもリンクしているのか。

(事務局)

予算は別で確保するが、ものは絞らず、様々な事業者に参加いただきたいと考えている。

(委員)

様々な変化と様々な施策を打ち、修正点をいかし、変化していくことが大事だと考えている。今年度の変化については非常に期待しており、方向性は良いのではと感じている。

(委員)

「センス」のある人たちと一緒に連携することが大事だと考えるが、その人たちを連れてくる力を行政の皆様がお持ちだと思ふ。パイヤーを連れてくるのも少ない予算で実施できる。高松市で1万円払ったら幸せになれたという気持ちを作るために我々は頑張っている。それを作るため予算を執行する者として、使い方の枠組みを作成していただきたい。

(委員)

様々な観点から連携し、伝統的ものづくりの振興に寄与してまいりたい。